

〔調査報告〕

働く婦人と育児の問題

第II報 台湾の至誠会員における概況

台湾・一三会

林 リン	梅 メイ	代 タイ	李 リ	慈 ツイ	愛 アイ	李 リ	絹 ユアン	梁 リヤン	金 チン	菊 チユウ	
梅 メイ	素 スウ	英 イン	葉 ユエ	瓊 チュン	玉 ユウ	陳 チエン	却 チエイ	鄭 チエン	采 ツァイ	蘋 ピン	
王 ワン	一 イー	媛 ユアン	蔡 ツァイ	瓊 チュン	霞 ツァイ	吳 ウー	彩 ツァイ	霞 ツァイ	李 リー	佳 チイ	音 ユイン

(受付 昭和48年7月3日)

はじめに

世界全般を通じて婦人の社会進出は目覚ましいものがある。それぞれの国において職業をもつ婦人の悩みは、育児と職業を如何に巧みに両立させるかということのようである。育児は次代を荷う世代のために大切なことで、各国共に父母の仕事、責任となつている。

私共一三会は、働く婦人と育児に関しての実態を掘もうとして、第一に至誠会員のアンケート調査を行ない、本誌43巻6号に発表した。一三会台湾在住の者が、今回は台湾至誠会員の概況を調査したので、その成績を報告する。

対象および調査方法

台湾の至誠会員は昭和46年度名簿によれば110人で、そのうち他国在住の者、住所不明者等が23人あり、昭和7~19年卒業の者は各学年5~15人あるが、他年度は1~2名である。しかも最近の社会情勢により更に数人の他国移住者もあり、80名に対して行なつた調査である。

アンケートは第I報に掲載したものとほぼ同様である。

人数が少ないので、年度別、時代別に見る事が出来ないで、一括集計した。

まとめ方も第I報と同じく、夫の職業別、妻の医師としての職業態勢別に、出産、育児についてどのくらいの期間仕事を離れたのか、子供に悪影響があつたか、それを防ぐための努力、方法、母仕事での育児担当者は誰か、現在育児を終了しての感想等について行なつたのである。

第I表 対象の年齢と育児時期の社会状況

現在年齢	人数	育児時期の社会状況
60才~69才	14人	人手は充分に得られ住宅環境もよい 第2次世界大戦になつても夫出征はなく 夫妻共台湾の医療に貢献する意気込み
50才~59才	25人	
49才以下	2人	
計	41人 (1人未婚)	

調査対象の現在年齢は第I表のように49~69才で、50代が25人であり、大体の育児時期の社会状況は、日本の場合の昭和13~16年卒の育児時期と同時期が多いと思われた。

LING Mei Tai, LEE Tsü Ai, LEE Juan, LIANG Ching Chüh, MEI Su Yin, YEIH Chüing Yüh, CHEN Cheih, CHENG Tsai Ping, Wang Yi Yüing, TSAI Chüing Tsia, WU Tsai Tsia, LEE Chia Yin: Child care of workinghousewife

Report II. Cases of the members of Shiseikai in Taiwan.

第2表 子供数と世帯数

1世帯の子供数	世帯数	子供の延べ人数
1	1	1
2	2	4
3	8	24
4	11	44
5	6	30
6	8	48
7	2	14
8	2	16
計	40	181(内5人死亡)
平均		4.5人

子供数は第2表のように181人、現存176人で、1家族平均4.5人であり、子供の年齢は現在41~11才である。

日本における調査よりも子供数は多く、8人が2家族もあつた。これは宗教や経済状況が関係していると思われる。

結婚年齢は第3表の如く、23~27才が多いが、20才も3例あり、学生結婚も6例で、母学生中に東京で、第1子、第2子、又は第3子まで育てたという例もあつた。

当時の台湾の社会状況としては、東京に遊学するのはエリート階級であり、医学を選んだ女子学生は、卒業後も地域の風習も考えて大いに台湾のために働き貢献するという確固たる希望をもつて入学して来ていた、しかし交通は飛行機もなく、1週間以上もかかつて帰省するような状態で、遠隔の地であつた。育児時期は第2次世界大戦に入る前頃からであるが、人手は安く充分にあり、食糧も内地程少なくなかつたし、台湾の人は出征はなく、

第3表 結婚年齢および学生時代の育児の有無

結婚年齢	人数	学生時代の育児
20才	3	3
21	1	
22	1	1
23	6	
24	7	1
25	6	
26	4	
27	3	
28	4	
29	3	1
30	2	
計	40	6

医療は台湾男女医、日本女医で保持され、私共は至誠会員として実に一生懸命働いたものである。

調査成績および考按

アンケート発送80名、返信のあつたもの41名、うち未婚1名で、40名の集計結果である。

夫と妻の職業、仕事態勢別にその人数および妊娠、出産、育児のために妻が職業から離れた期間、及び母子分離の影響、両立の可、不可等を表示したのが第4表である。

夫妻共医師であるのは35名87.5%で、日本の68.8%よりは遙かに多い。日本においては大学卒の年代が80%となつているが、台湾の年度に近い昭和16年頃までをとると28%となり、台湾の方

第4表 夫妻職業態勢と育児状況

夫の職業	妻の職業 (医師)		人数 (%)	職業と育児との両立の可・不可		母子分離の影響の有無		妊娠・出産・育児のために仕事を休んだ期間 (単位人)												
				可	条件付可	不可	有	無	0.5	1	1.5	2	3	4	6	7	10	3年	10年	計
									ヵ月	ヵ月	ヵ月	ヵ月	ヵ月	ヵ月	ヵ月	ヵ月				
医 師	開 業	同所	14 (35.0)	1	12	1	11	3	3	8	1	1	4		1	1	1	1	1	22
		別所	4 (10.0)		4		1	3	1	1		1	1							4
	勤 務	勤 務	1 (2.5)		1								1							1
		開 業	12 (30.0)	2	10		7	5		4	2	3	1						1	11
牧 師	勤 務	勤 務	4 (10.0)		4		3	1		1	1	1			1				4	
		開 業	1 (2.5)			1	1		1											1
法 律 家	開 業	勤 務	1 (2.5)	1			1							1						1
		開 業	2 (5.0)		2			2	1	1										2
学 生	学 生	1 (2.5)		1			1												1	
計			40 (100.0)	4	34	2	24	15	6	15	4	6	7	1	2	1	1	1	2	46

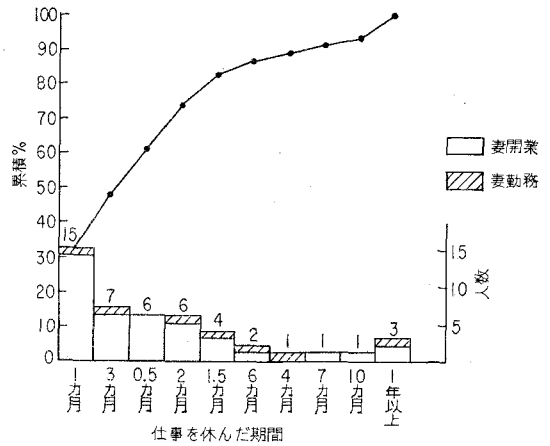
(不明1) 注 (学生1も卒業後は開業をやめていない。)

が同業夫婦が多い。医師以外の職業は牧師と法律家のみであった。1人だけ夫妻東京にて勉学中に産産し、育児を台湾の祖父母に担当して貰った人があった。その時代は日本であった台湾も、勉学に上京する人にとっては遠隔の地であり、勉学中の父母も郷里の祖父母も子供達も耐える事が多かったと思われる。学生中に幾人かの育児を行なった者は6名あった。今思えばよくやつたとふり返って感無量である。

妻の職業態勢は開業が多く33名82.5%で、夫妻共同開業35%、別開業47.5%で、勤務医は15%と少なかった。日本の場合、家事専念として仕事を止めた人が12.3%あるが、台湾においては1人もなく、すべてが多少にかかわらず医業を続けている。日本の場合の開業60.3%、勤務27.4%と比較すると、開業が多い。これは社会状況、男女の考え方も大に関係している。家の構造、同居の風習等に加えて、開業の場合は看護婦が得易く、育児、家事には人手があるので、職業をつづけたという。中には第2子まで3年間職業をやすみ、又は長子10才になるまで育児に専念し、その後開業したという人もある。これは古い時代のことで、若いといつても現在年令49才、眼科の人は特殊な技術を要する科では、やはり仕事中断は好ましくないといつている。

妊娠出産のために仕事を中断した期間は、時代の変遷、第2次世界大戦等により異なるようであるが、早い者は出産後2週間で医業をはじめている。これは開業の場合のみで、勤務医は6~8週間で職場復帰をしている場合が多い。3カ月以内が大多数を占め、38名、82.8%、1年以内に91.5%が仕事を開始している。日本の場合は57.4%が3カ月以内、83.9%が1年以内に復帰しているが、台湾の方が一般に仕事を休んだのは短期間である。

この仕事での母子分離が子供に影響するというのは24人、60%、無しとする者15名、37.5%であった。日本では88%が影響ありとし、しかも悪影響が多いという意見であったが、台湾では悪い影響の例としては、依頼心が強い、淋しがり、過保護など日本の場合と同様なものの他に、父母が



第1図 仕事を休んだ期間とその割合

医師であることを自慢し、たかぶつていて素直でない等があり、共働きで母不在の劣等感は少ないようである。却つて好影響として、独立心、勉学心、衛生観念が早くから発達し、母をよく理解する等が多くあげられていた。しかし、母としては接触の時間が少ないことを心配し、母過労のための早産、多忙のため幼年時に子供を失った悲しみ、病气勝ちな子供に対して母の保護の不足を心配している。子供を死亡で失ったのは前述の如く181人の子供中5人であった。

総体的には母の職業を持つことは、母の行き届いた注意があれば子供には影響なく、若し影響があつてもよい方面がかなり多いといつている。日本の影響なし12%と比して、台湾は37.5%と高率である。これは育児担当者にもよるのかもしれない。

母仕事での育児担当者は祖父母と女中と子守又は乳母が18例、子守9例、女中7例、乳母2例で、第5表のようになる。乳母2例というのは昭和年代としては珍しく、人手が豊富である事を物語つていられる。学生結婚の1例をのぞいては、すべて母と同居で、育児責任は母であり、仕事では祖母をはじめ多くの協力者を得ての個人保育で、昼間だけ母と離れる場合のみであった。人手は充分にあり、祖母(姑でも実母でも)の監督の下に昼間の育児が行なわれることが多いので、母の仕事に復帰する期間が早く、子供に対す

第5表 母仕事中の育児担当者

育児担当者	人	数
祖父母と女中と子守	12	18
祖母と乳母	1	
祖母と子守	3	
女中と子守	2	
子守	9	17
女中	7	
乳母	1	
祖母	3	4
母のみ	1	
保育園	0	
計		39

る悪影響も少ないという結果が出たのかも知れない。

職業と育児の両立については第4表のように母子共に好都合で両立可能4例、多少の犠牲はあるが両立可能34例で95%は両立可能、不可能とした2例も意見として述べながら実際には医業を営み、多くの子供を立派に育てあげている。きびしく反省し、子供のことも考えて不可能と考えると述べている。これから見ても、職業と育児の問題はなおいろいろの面から検討され、母子両方に最もよいという解決点を見出したいものである。

土地柄、社会的背景も異なるが、この調査では総体的に台湾の至誠会員の方が仕事に意欲的で、育児にも前向きに取り組んでいるようである。創立者吉岡弥生先生の意を体し、その後を歩んで行く心構えを素直に感じ、実践しているように思われる。日本の場合と同様に、育児と医業を共に行ない両立させるには、母親自身の健康と仕事を続けようとする意欲が絶対必要条件であり、自宅開業の態勢が最もやりやすい態勢と思うと言っている。勤務の場合は、時に応じて勤務態勢をやや軽くして時間的余裕を持つようにして、子供の成長と共にフルタイムの勤務にする等の配慮をすべきである。1人だけは夫の世話をよくしないという理由で離婚になった者があるが、子供は自分1人で充分よく育てる事が出来たと言っている。日本の場合のように、特に夫の理解、周囲の人の理解協力を求める声の少なかつたのは、夫婦同業が多いこと、人手が充分あり家事の雑用が少なく、母

1人の努力で家庭造りが出来るのかも知れない。或は医を志した時点から卒業の暁には医業を続けるという周囲の認識もあるのかも知れない。子供が幼児期には朝昼夕3食を、学童期には朝夕2食を、更に成長した後は夕食又は夜食を必ず共にして、話し合いの場をつくり、時間を活用すること、1年に1度は家族ぐるみの旅行をして楽しいムード、楽しい思い出を共に持ようにすること。自分は女の子ばかりで男の子が欲しかつたので8人も子供を産んだが、或程度の産児制限は必要と思うこと、育児に対しては或時期は仕事量を減らしても必ず母乳というくらいの意欲と、子守を頼んでも母が傍にいて育てるという心構えを持つこと等を強調している。そして娘の中の1人、嫁の1人は女医でありたいと思うし、事実そのようになっている人が多い。両立不可能と返信された2人は、自分も真の意味では結婚しない方がよかつたといわれたが、他はすべて結婚して幸福な家庭を築き上げ、母子共に多少の犠牲があつてもそれを賢明にのりこえてよい子を育て、いささかなりとも人類福祉に貢献するために医業を行なつて行きたいと言っている。子供達も成長した後は母の苦勞と聖職を理解し、誇りに思うという感想が多かつた。ふり返つてあまり苦勞なく両立出来たという人の多い点が日本と異なる。

2, 3人の意見として、夫婦協力して職業と育児を行なう場合に、努力しても夫と一致しない時は早くに離婚すべきであるというのがあつた。これは日本の調査の場合にはなかつた感想で、恐らくその様な場合に、日本であれば妻が仕事を断念して家事に専念するのであろう。国民性の差かとも思う。

むすび

日本の至誠会員に対しての仕事と育児に対するアンケート調査につづいて、台湾の至誠会員に対して同様調査を行なつた。

会員も少なく、対象は49~69才の80人で、返信は41通であつた。

台湾においては住居、人手、社会情勢の関係か、共働ぎが多く、母はあまり家事の雑用に追い廻されずに医業と育児を両立させていて、40通の

中に職業を捨てて家事専念という人はいなかった。

日本の場合よりは育児のために仕事を休む期間は少なく、1年以内に91.5%が仕事に復帰していた。

日本と同じく、母の健康と仕事に対する意欲が両立の可否を決定する。台湾の至誠会員は健康と猛烈な意欲で100%が医業にいそしんでいる。夫妻同業が多く87.5%であつたのは、言わず語らずに妻の仕事を理解している場合が多いのである

う。自宅開業の態勢が育児と仕事の両立には最も好都合で、母子隔離の子供への影響を少なくする上に、台湾では多く祖母の監督する個人保育であることも、母が安心し、満足して仕事の出来る状況なのかと思う。

台湾の至誠会員は今も吉岡弥生先生を尊敬し、御教えをまもり、よい子を育てつつ、医業をつづけている。

(この調査報告の要旨は、第39回東京女子医科大学学会総会において発表した。)